

平成25年度復興支援の担い手の運営力強化実践事業

いわて文化支援ネットワーク通信

アシスト・なう

9号

発行日
平成26年3月21日

発行:特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター / 印刷:杜陵高速印刷株式会社

- 1面 いわてフィルハーモニーオーケストラ 3.11「未来へ届ける歌」 ■2面 トヨタ子どもとアーティストの出会い in 大槌
 ■3面 フォーラム「子どもたちの文化芸術体験」 ■4~5面「トヨタ子どもとアーティストの出会い ネットワーク会議 in 神戸」報告
 ■6~7面 ~ワンコイン募金~釜石市民劇場への支援 ■8面 いわて文化支援ネットワークはこんな支援をしています。



平成26年3月11日。震災から丸3年を迎えたこの日、盛岡市民文化ホール大ホールにて『東日本大震災3周年行事復興への誓い』が行われました。この行事の最後を締めくくる『未来へ届ける歌』の演奏に参加しました。

『未来へ届ける歌』は、一般市民の方々から寄せられた詩をもとに、シンガーソングライター・菅野創一朗さんが作詞し、作曲家・柴田誠太郎さんが作曲したオリジナルソングです。歌は宮古出身の民謡歌手・小田代直子さん、コーラスは不来方高等学校音楽部の皆さん。演奏は、もりおかジュニアオーケストラの皆さんと、いわてフィ

ルハーモニーオーケストラのピックアップメンバーがつとめました。

もりおかジュニアオーケストラ。いわてフィルハーモニーオーケストラの『主よ御許に近づかん』、畑中美耶子さんの朗読『無声慟哭』、不来方高等学校音楽部の『ふるさとの山に向ひて』、小田代直子さんの『明日への虹』の演奏の後、全員で『未来へ届ける歌』を演奏しました。

演奏終了後には、観客の皆様から惜しみない拍手を頂戴し、また、イベント関係者の方々からも「とても素晴らしかった」「感動した」というお声をいただきました。

フォーラム「子どもたちの文化芸術体験」

日時：平成26年3月14日(水) 19:30~21:00 会場：いわてアートサポートセンター風のスタジオ

〈コメンテーター〉(敬称略)

- 荻原慶子(東京都/公益社団法人企業メセナ協議会事務局長)
- 寺崎 巖(盛岡市/いわてフィルハーモニーオーケストラ代表)
- 清水義昭(東京都/トヨタ自動車株式会社社会貢献推進部)
- 板垣崇志(盛岡市/心輝く造形あそびプロジェクト「からふる」副代表、花巻市るんびにい美術館アートディレクター)

〈司会・コーディネーター〉

- 坂田裕一(盛岡市/いわてアートサポートセンター理事長・岩手県演劇協会会長)



「表現する」ということは子どもたちにとって非常に楽しいことですが、その楽しい瞬間は必ず過ぎていきます。その一瞬は楽しくても、そこから数時間経過すればまた元の暮らしに戻ります。しかし、その楽しかった一瞬は無意味かという、決してそんなことはない。たった一瞬でも何かに夢中になつて、悲しい思いをほんの短い時間でも完全に忘れ去る瞬間があったとしたら、心の中に何かのエネルギーが生まれると思います。

どんな作品が出来上がるかはさほど重要ではありません。最終的に作品らしいものが残らなくてもそれはそれで構いません。作品の質より、それを生み出す過程や生み出した瞬間の喜びこそが、子どもにとっての表現の重要性です。

仮設住宅の生活を余儀なくされている子どもたちは、常に抑圧された環境の中にいます。子ども同様おとなのストレスも過重な状況にあり、それがまた子どもたちに影響を与えています。子どもだけではなくおとなと一緒に表現を楽しむということも有益だと思います。一緒に笑う体験は子どもにとってもおとなにとっても重要です。ひとつの行為を一緒にやることで、親子が喜びを共有し、そこから幸せな関係を回復していくことで、やがてはコミュニティ全体の回復につながっていくのではないかと思います。

「我々は広く浅い支援を続けていっているのか」ということが課題です。ある程度、継続的な支援のかたちを見据えて、今後も活動していければと思います。

トヨタ・子どもとアーティストの出会い in 大槌

昨年度の「トヨタ子どもとアーティストの出会い」では、大槌の被災4小学校へ、アーティスト派遣と4小学校の校歌を取めた記念CDの作成をしました。

平成25年度は、4つの小学校が一つに統合され「大槌小学校」として新しいスタートを切るにあたり、新しい校歌の金管バンド編曲と指導を依頼されました。

10月5日(土)、第66回岩手芸術祭「岩手芸術復興支援フェスティバル」(岩手県民会館)での演奏披露と、新設されて迎える初めての学習発表会(10月12日)に向けて、57人の金管バンド合奏練習



実施時期：平成25年9月7日(土)~10月12日(土)
 ワークショップ実施場所：大槌町立大槌小学校(全3回)
 参加者：大槌小学校 金管バンド57名
 いわてフィルハーモニー
 総括・式・編曲：寺崎 巖(いわてフィルハーモニー)
 演奏：(トランペット) 佐々木駿、佐々木治子
 (トロンボーン) 白旗弘、佐藤希、吉原正教
 (アルトホルン) 佐々木治子
 (チューバ) 谷藤綾香
 (パーカッション) 熊谷綾子、江越海

「あたえよう希望と感動を ふみだそう歴史に残る第一歩」

(大槌小学校学習発表会スローガン)



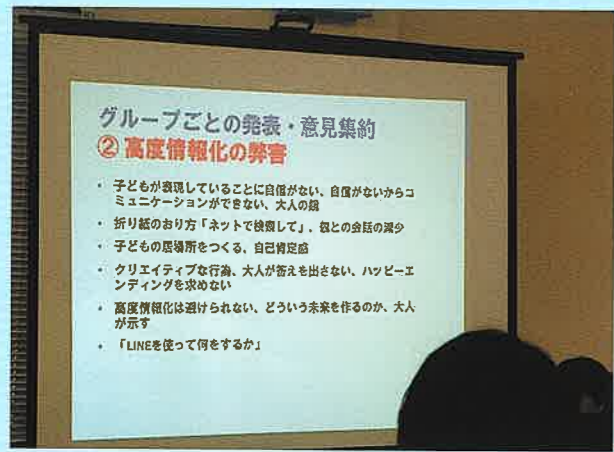
を重ねました。

9月7日(土)からスタートしたワークショップは最初に各パートの担当アーティストの直接指導から始まりました。演奏技術は勿論のこと、楽器の扱い方やチューニングなど、基礎的な勉強にも子どもたちは真剣に取り組んでいました。

物静かで、最初は演奏にも自信がなさそうだった子どもたちが、ワークショップを重ねるごとにどんどん演奏技術を習得し、また徐々に心を開いてくれるようになっていく過程を目の当たりにし、ワークショップによって「楽器を演奏する楽しさ」「アンサンブルの楽しさ」を十分に味わうことができたのではないかと実感しています。学習発表会リハーサルでは、たくさんのお客様の前での演奏とあって、子どもたちは緊張の面持ちでしたが、ずっと近くで指導してくれたアーティストが近くにいることで、心強く感じているようでした。

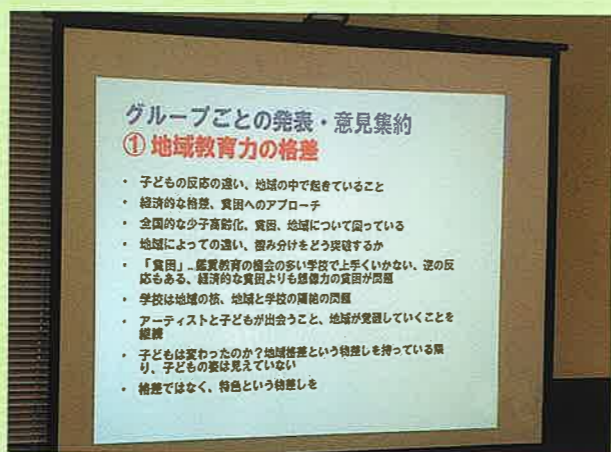
いよいよ学習発表会本番。ワークショップ開始当初より格段に上達した演奏を聴くことができました。何よりも子どもたちの表情がとても生き生きとして、「演奏が楽しい！」という思いが全身からあふれてきていたのが印象的でした。

当初は、学習発表会で新校歌も披露する予定でしたが、練習が追い付かず、今回は「海兵隊」「ひよっこりひょうたん島」の2曲のみを披露する形になりました。新校歌の演奏指導は、今後の支援の中で、継続していければと思います。



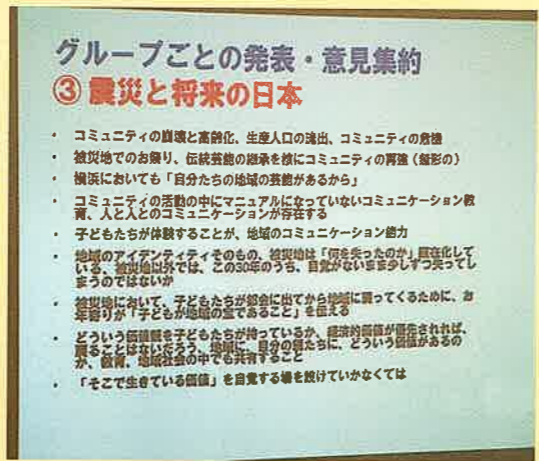
グループ②高度情報化の弊害

「情報の扱いについて大人がもっと手本にならなくてはいけない」「子どもの表現に自信を持たせる上で、大人が答えを出さず、ハッピーエンドを求めてはいけない」という意見が出されました。



グループ①地域教育力の格差

「格差ではなく特色という物差しを持つこと」や「アーティストと子どもが出会うこと、地域が覚醒していくことを継続していく必要があるのではないか」等の意見が出されました。



グループ③震災と将来の日本

「地域のアイデンティティーそのものが失われていく被災地の問題は30年後の日本全体の問題になるだろうという予測の基に、「子どもが地域の宝であること」を伝えていく必要性や「そこで生きていく価値」を自覚する場を設けてはいけない！」等の意見が出ました。

市化する地域で生活する子どもたちに『祭り』はあるのか？と考えると、今子どもたちのさまざまな問題(いじめ、不登校、その他等)やひずみが特に現れていると思われる新興住宅地には、引き継がれてきた祭りどころか文化さえないのでないか？実はそこに何か大きな問題があるのではないかと気づかされた。震災は子どもたちの現状や課題を克明に浮き彫りにしたが、本当に

怖いのは身のまわりにある気づかない課題や見えにくい現状ではないのか？子どもだけの問題に限らず、今被災地で起こっている問題は日本の縮図であり、これからの10年先に向けた課題であることに皆が気づき、検証していかなければならぬのではないかとこの意見が出されました。
2日間のネットワーク会議通し、「子どもとアート」をテーマに全国で活動している団体・個人の皆さんと交流させていただいたことは、今後の活動の方向性を考える上で大いに参考になりました。また時代の証言者は未来の提言者となり得るという自覚をもち今後の文化支援に関わりたいと思えました。

(報告・打田内)



「トヨタ・子どもとアーティストの出会いネットワーク会議」が、神戸を会場に開催されました。
これまでこの事業にコーディネーターとして関わった方々が一堂に会し意見交換したものをまとめ、「アートNPOフォーラム」の中の分科会の一つとして、一般参加者を交えさらに意見交換を重ねました。
「これからの子どもたちの取り巻く環境について考える」をテーマに始めに、この会議のファシリテーター大澤寅雄さん(アートNPOリンク事務局)から、様々な統計データを基にした過去数十年の子どもたちを取り巻く環境の変化や現状の課題について解説いただき、グループ討議のための3つのテーマ①地域教育力の格差②高度情報化の弊害③震災と将来の日本が提案されました。
参加者はその場で、興味のあるテーマを選択し、グループごとに椅子を寄せ合っての話し合いになりましたが、「震災と子どもを取り巻く問題をテーマにした③グループの参加者は驚くほど少なく、行き場をなくして渋々参加する様子の人も見え、出題されたこのテーマのバランスの悪さと、現実として被災地への興味が薄れつつある現実を痛感しました。
私からは、岩手の被災地の子どもたちの現状を報告すると共に、昨年度の



トヨタ助成事業で実施した宮古市立鎌ヶ崎小学校の子どもたちと一緒に経験した出来事。そして民俗芸能の宝庫といわれる岩手沿岸部で土着の芸能や祭りが培ってきた地域のコミュニティや精神性について説明し、それらが今回の津波により流失してしまった後の一年目の夏、祭りを待ちわびる子どもたちの様子などを紹介しました。
参加者からは、これまで被災地の子どもたちの現状報告を聞く機会はありませんでしたが、「祭り」「民俗芸能」という切り口の話は殆ど知らなかった。「改めて都